

説明と物語

——社会調査は何をめざすべきか

盛山 和夫*

■要 旨

社会調査の方法に関して、量的調査と質的調査との二分法的対立を強調する議論があいかわらず絶えない。最近ではとくに、それまで考えられてきたような客観的な「説明」をめざす経験科学ではなくてむしろ「物語」だとみなすような社会学観が広がっており、この観点から、質的調査こそ物語的な社会学にふさわしい調査の方法だと考える傾向が少なくない。本稿は、こうした二項対立的な見方が基本的に誤りであることを明らかにしようとするものである。

二項対立的な見方をもたらしている最大の要因は、社会学の方法についての極端な経験主義を軸とする自然科学モデルであり、これは、それに憧れた研究者たちとそれを嫌悪する研究者たちという対立する両陣営から、共通に自明視されてきた大きな錯認であった。実際には、きわめて実証主義であったデュルケムの『自殺論』に顕著であるように、社会学の発展を支えてきた主要な既存研究の成功は、自然科学モデルから大きく離れて、むしろその「物語性」にこそあった。

そもそも説明と物語とを対立的にとらえることが間違いなのであって、自然科学の科学的説明でさえしばしば物語的である。ましてや、意味世界としての社会的世界についての探求は、当該の社会や現象それ自体に埋め込まれている物語を、研究者の視点から新たに再構成するしかない。したがって、質的調査だけでなく統計的な量的調査においても、われわれは「説明」と同時に「物語る」ことをめざさなければならない。

キーワード：物語、説明、社会調査、質的調査、量的調査

*東京大学

1 法則でも経験的一般化でもなく

1.1 法則定立という誤謬

量的な社会調査とは法則定立をめざすものだという誤解は、減少したとはいえ、いまだに後を絶っていないように思われる。日本で長い間読まれつづけている社会調査の古典的ともいえるテキストにそう書いてあるのだから、この誤解をなくすのは容易ではない。(私自身のテキスト〔盛山, 2004〕では、何とか誤解を解くよう微力を尽くしているのだが。)

むろん、量的な社会調査を実際に行っている人は、研究者であれ実務家であれ、社会調査の実態が法則定立というようなことからかけ離れたものだということは、十分すぎるほどよく知っている。普通はむしろ、調査データというものは、ほとんどカオスでしかないように思われるものだ。

もともと量的な調査データの統計的分析において「法則の定立」がめざされるべきことだと見なされたのは、初期の統計学者であるケトレーの「平均人の法則」やゴルトンの「回帰の法則」などのせいである。「平均人の法則」とは、人々の身体的、知的、あるいは道徳的特性などの「統計的な平均値」が「代表的個人」を表しているというものだ。「代表的」というのは「真の」という意味に近い。いうまでもなくこの法則は確率論の「大数の法則」を下敷きにしている。(数学上の定理が「法則」と呼ばれるのも不思議なことだが。) もしも人々の特性が「共通の真の値」から確率的に散らばって出現しているのなら、ケトレーもあながち間違いではなかっただろう。しかしむろん、そんな「真の値」などというものは存在しない。

ゴルトンの回帰の法則は、平均から離れた特性値を持つ父たちとその息子たちの平均特性値を比べたとき、後者は父たちの特性値よりも全体平均の方に回帰しているという命題である。この命題は正しい。実際、もしもそうではなくて、息子たちの特性値が父たちとおなじ平均値を中心に散らばっているとすれば、世代を経るにしたがって、人間の身長や体重などの特性分布はどんどん広がっていくことになってしまう。逆にいえば、回帰の法則が成立するのは、ある集団内の遺伝特性の平均と分散が世代を超えても安定してい

るときである。(たとえば、ランダム・ウォークという確率過程の場合には、回帰の法則は成立しない。)

しかし、回帰の法則はメンデルの法則と同じように生物学的な遺伝現象に関わるものであるし、そのような法則的な現象が見つかることは、自然現象でさえきわめて稀なことなのだ。

ましてや、経験的一般化から法則を取り出すことができるなどということは、まったくありえない。経験的一般化というのは、あるデータについて何らかの統計的な関連が見出されたとき、そうした関連が基本的に任意のデータについても成立すると予測することである。こんな予測が予測として愚かしいものであることは、誰にも分かる。ある時、鯨がはねた直後に地震が起こったのが見出されたことから「鯨がはねると地震が起こる」と予測するようなものだからである。

1.2 過度の経験主義

法則定立や経験的一般化というような観念は、社会調査や社会学につきまわってきた「過度の経験主義」に根ざしている。過度の経験主義は、われわれが知るべきすべてのことは観測された経験的データそのものの中にあると考える。ただし、この「そのもの」の中には、データを何らかの形で加工処理したものも含まれる。たとえば、平均や分散、あるいは相関係数や回帰係数や決定係数のような統計指標がそうである。因子分析や共分散構造分析のような複雑な計量モデルを用いた計算結果も含まれる。こうした統計的処理が出力する数値は、もともとのデータに潜在していた構造的な特性を、何らかのアルゴリズムにしたがって取り出したものであり、その意味において「データそのもの」なのである。

社会調査の目的がこうしたデータそのものの構造的特性を取り出すことだと思っている人が意外と多い。あるいは、そうははっきりと思っているのではないにしても、実質的に、そう思っているのと同じことしか行っていないような調査データの分析が少なくない。統計的分析を用いない質的調査でも似たような傾向が見かけられる。その場合、たとえば対象者が語った発話そ

のものをなるべくそのままの形で提示すべきであり、そこにこそわれわれが知るべきリアリティがあるとされるのである。

こうした傾向は、経験主義の極端なそして悪しき影響から来たものだ。経験主義の穏当で、かつ中核的な意味は、「われわれの知識は、経験的に観測されることがらに基づいていなければならない」と表されるだろう。しかしこの「基づいて」というのは曖昧な言葉なので、多様な解釈が可能になる。私は、経験主義の原則はせいぜい「できるかぎり経験的に観測されることがらによってチェックされるべきこと」という意味で十分だと思っている。知識の中に、それ自体としては経験的に観測しようのない事項（たとえば「引力」や「エネルギー」）が含まれていても全然かまわない。ましてや、法則や理論は、ヒュームが正しく指摘したように、経験的には永遠に検証（その「正しさ」が証明されること）されようがないものだ。

ところが極端な経験主義は、科学的に妥当な知識は経験的に観測可能な事項だけしか含んではならないと考える。また、経験的に観測可能な事項だけからなる知識だけが、われわれにとって知るに値するものだとも考える。かつての行動主義心理学はこの一種である。

ここには、経験的に観測されていないものは、研究者が主観的にでっち上げた虚構の観念であり、そうしたものはまったく知るに値しないものであり、それからなる知識は誤ったものだ、という判断がある。確かに、この判断を構成しているもののうち、次のポイントはまったく正しい。すなわち、経験的に観測されるものは、単に主観的に観測されるのではなくて、基本的にわれわれにとっての「共同の観測」であって、共同の知識基盤を形成する、ということである。それと比べると、経験的に観測されていない事柄についての知識は、必ずしも共同ではない主観性の度合いが高い。

しかし、次の点でこの判断は間違っている。それは、経験的に観測されておらず、主観的な推測によって作り上げられた知識は、必ず虚構であって実世界との対応を持たないと考える点においてである。真実はそうではなくて、万有引力やエネルギーや DNA が発見される前の遺伝子のように、科学者の主観的な推測によって作り上げられた知識の中にも、実世界との対応を

正しく持ちうるものが存在するのである。そして、一般的に言って、われわれの知識の発展は、推測によって作り出されながら、さまざまな吟味を経た結果、正しい推測だと共同で認定されるような知識を蓄積することからなっている。単なる観測事実の積み上げだけからなっているのではない。

1.3 データ・法則・物語

社会調査の話に戻ろう。今日、調査データを分析する人々は、そこから「法則を定立する」などということが、かりにそれをめざしたとしてもとてもできるようなものではないことをよく知っている。「法則」のように、複雑で多様な観測事実を知的なしかたで齊合的に理解可能にしてくれるような図式は、観測データの中にすぐさま見えるような形で横たわっているわけではないのである。

だいたい、量的な社会調査データにおいて何らかの「理解可能な事実」が見えてくるのは、調査研究過程のずっと後段になってからである。通常の調査票調査の場合、対象者の回答は調査票上に記入された後、コーディング等を経ていったん数字化されて何らかの電子媒体に記録される。この間、研究者は、部分的なケースについて面接やコーディングに携わることがあるけれども、決して全体像は分からない。（すべてのケースにあたったとしても同じだ。）われわれが何かを知ることが出来るのは、統計ソフトを用いてデータファイルを読むことによってである。それまでは、そこに何が「書かれているか」は知りようがない。

これは、聞き取りや観察や書かれた文書を直接の分析対象とすることの多い質的な調査ときわめて対照的である。この場合、データはわれわれが直接読んで理解できる形式で与えられている。実際には多くの場合——とくに聞き取りや観察などでは——、インタビュアーや観察者が理解できたことが記録されているのである。このように、データそれ自体が直接読んで分かる形式のものだということは、ある意味で、データ自らが「読み方」を提示しているようなものである。これを「自己解釈提示性」と呼ぼう。質的な調査研究は、このデータの自己解釈提示性によって大いに助けられている。なぜな

ら、分析者が調査データを分析した結果としてある「物語」を記述しようとするとき、自己解釈提示型のデータはそれ自体で物語を構成する一部ないし物語そのものを提示してくれるからである。むろんここには危うさもあるのだが、それは後で述べることにしよう。

「物語」は、近年、とくに質的調査に関連して述べられていることが多い。しかし、実は、社会調査の分析結果を物語として報告するという技法は、決して新しいものではなく、古くから実践されていたことである。ただ、一つのありうべき技法として広く意識されたり承認されたりしていたわけではなかっただけだ。たとえば、「法則」も一つの「物語」である。ケトレやゴルトンの例から分かるように、「法則」とはさまざまな諸事実に一貫した見通しを与えるものなのである。さまざまなタイプの「物語」がありうる中で、彼らは「法則」というタイプの物語を定立しようとしたのだといえる。

科学が強度の経験主義にとらわれていた時代には、質的な調査もまた、観察されたことをありのままに記述することが正しい研究のあり方だと見なされていた。人類学者たちは、対象社会のありのままの姿を記述しているつもりであった。あるいは少なくともそのように見せかけていた。だが、マリノフスキーや M. ミードなどを読めば分かるように、民族誌とはすぐれて「物語」なのである。

2 デュルケムにおける「アノミー物語」の構成

社会学の量的データ分析における「物語性」の意義を理解するのに、デュルケムの『自殺論』ほど適切な例はないだろう。そのことを「第5章 アノミー的自殺」に焦点を当てて確かめておきたい。この章は、次のような構成になっている。

(1) まず第一節で、経済的な状況と自殺率との関係を示す5つの図表を順次示しながら、「産業上あるいは金融上の危機が自殺を増加させるといっても、それらが、生活の窮迫をうながすためではない。なぜなら、繁栄という

危機も、それと変わらない結果をもたらすからである。真の理由は、それらの危機が危機であるから、つまり集合的秩序を揺がすものであるからなのだ」[Durkheim, 1897=1985: 299-300]と説明され、「集合的秩序の動揺」と自殺との関係が示唆される。

(2) 次の第二節は、データは示さず、個人の欲望とそれに対する社会的規制との関係についてのデュルケムの考察が展開される。まず、人間は一切の拘束から自由になることができるのではなくて、かれに優越し、かれ自身そのことを感じているもの、すなわち社会からの拘束を受けるのだ、という基本命題が述べられる。そして、経済的破綻が生じたときにも、逆に突然の好況に見舞われたときにも、社会による拘束あるいは規制が欠落し、「この無規制あるいはアノミーの状態は、情念にたいしてより強い規律が必要であるにもかかわらず、それが弱まっていることによって、ますます度を強める」[Durkheim, 1897=1985: 311]という風にして、「アノミー」の概念が提示される。

(3) 次に、職業別自殺率のデータを示しながら、「アノミー」は突発的な危機状況においてのみ発生するのではなくて、日常的な社会生活にいつも潜在しているものだということが論じられる。

(4) そして、第四節で、アノミーが経済生活だけではなく、社会生活の全領域に関わっているのだということが、とくに家族生活に焦点を当てながら論じられる。ここでも、各種の統計データが駆使されており、全部で8個の表が示されているが、未婚、離婚、別居、死別という婚姻上の地位を、年齢、性別、あるいは地域などと組み合わせた複雑なデータ表示が多い。ここでは、自殺への「免疫」あるいは「抑止率」という概念を用いて、離婚に伴う抑止率の変化が妻と夫とで逆向きであることが強調される。

(5) そこから同じ節の中で、結婚生活とは何であって、それが男性と女性とにどのように異なる意味を持つものであるかが論じられ、次のような興味深い結論が導かれる。すなわち、一夫一婦制は、男にとってはその情念を規制して精神の均衡をもたらすという利益をもたらすのだが、規制から生じる苦痛に対して、男の場合は、他に情念を追究する機会に恵まれている。逆

に、女性にとっては「償いもなければ軽減もない」「この規制は、女子にとっては、これといった有利さも与えられない一つの拷問なのだ」[Durkheim, 1897=1985: 339-340]とされるのである。

以上が、アノミー的自殺についてのデュルケムの理論と実証の骨格である。最後の、結婚生活についてのデュルケムの解釈はもちろん、アノミーと自殺率との関係についてのデュルケムの理論が正しいかどうかはここでは問題ではない。重要なことは、デュルケムの議論の仕方における「物語性」である。ここには次のように、実に3種類もの「物語性」が存在するのだ。

まず第一に、全体の構成がみごとな劇的構図を持っている。上で、(1)～(5)に分けた諸部分は次のように整理できる。

- (1) 起。データを示しながら、経済状況と自殺との関連についての新たな知的問題が提起される。
- (2) 承1。起で提起された知的課題に答えうるような理論図式（アノミー理論）が提示され展開される。
- (3) 転1。その理論図式の広範な適用可能性が新たなデータとともに証示される。
- (4) 転2。さらにまったく別の現象である結婚生活にまで、その理論図式が適用可能であることが、データとともに証示される。
- (5) 承2。承1で提示されたアノミー理論が、結婚についての理論と結合されてさらに展開される。

ここには「結」に当たる部分が存在しないが、それはこの章の後、『自殺論』全体の中の後半部分が「結」の役割を果たしているからである。いずれにしても、第5章のこの構成のしかたは、「アノミー的自殺」という概念の意義を読者に強く訴えるものになっている。統計的データを用いるかどうかを問わず、研究論文というものが取るべき構成のしかたの一つの模範を示しているといってよい。

第二に、ここには次のような別の物語性が埋め込まれている。それは、承1における「アノミー」という物語と、承2における「結婚生活の意味の男女での違い」という物語とである。アノミーは、『自殺論』全体を貫くテー

マで、承1の部分はいわば主人公が華々しく登場する場面なのだが、社会学的研究の場合、主人公やその他の重要な登場人物に当たるのは概念や命題や理論であり、それ自体が一つ一つの物語をなしている。「アノミー」という物語は、「人は完全なる自由、無規制状態では生きられない」というメッセージからなっている。これは、われわれ人間の逃れられない宿命としてわれわれに示される。

もう一つの「結婚生活の意味」もまた、男と女の関係をめぐる一つの宿命的な構図として提示されている。宿命的ないし運命的なものとして示される逃れられない拘束ないし構造は、存在に「意味」を与える。「そのようなものとしてあるほかはないのだ」という宣告ほど、人生に明確で確固とした基盤を与えるのに効果的なものはないのだが、デュルケムがその社会学理論で開示している「アノミー」や「結婚生活」の概念は、いずれもそうした宣告を下すものになっている。

考えてみれば、社会学理論のこうした性質はデュルケムだけではない。ウェーバーが、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』[Weber, 1920=1989]『職業としての政治』[Weber, 1919=1980]あるいは『職業としての学問』[Weber, 1919=1980]などで、いかに宿命論的な響きを持った語り方をしていたかを思い出すこともできるだろう。

それはともかく、『自殺論』の第5章には、さらに第三の、一般の計量的研究論文に共通する物語性があることを指摘しなければならない。この章では、(1)の部分で5個、(2)の部分で1個、そして(3)の部分で8個、計14個の自殺に関する統計的データが提示されているが、それぞれのデータは、決して「アノミー」や「結婚生活の意味の男女の違い」を「直接」に示してはいない。自殺統計のどこにも、「アノミー」や「結婚生活の意味」というような言葉は表されてはいない。たとえば、第55表[Durkheim, 1897=1985: 298]は、自殺率の高さによってフランスの各県を分類し、それぞれの県グループごとに「人口1,000人当たりの自己の収入で生活しているものの平均数」を示しただけのものであり、単に、「経済的に豊かな地域ほど自殺率が高い」ことが示唆されているにすぎない。そもそも、自殺統計のも

とになるはずの個々の自殺を考えてみても、それぞれに「自殺の原因」を表す符牒や証拠がついているわけではないし、ましてや「私はアノミー的自殺で死にます」というような遺言が残されているわけではない。自殺統計というのは、単に、自殺という現象を数え上げただけのものだ。それは、年齢、地域別、あるいは既婚・未婚別などでクロス集計したとしても同じである。

デュルケムの『自殺論』は、計量分析としてみた場合、これらのバラバラな統計データを統一的に理解する一つの「物語」を提示しているのである。すなわち、自殺という現象をもたらす「社会的原因」を「個人本位的」「集団本位的」そして「アノミー的」な自殺（これらのほかに、第4の「宿命的自殺」があるが、これはデュルケムにとって重要なものではない）の類型によって説明しようとしているのである。この自殺類型は、個々の自殺を分類するものではなくて、自殺の社会的原因の類型である。（もっとも、デュルケム自身、個々の自殺の類型であるかのように扱っているところもあるのだが。）

『自殺論』の成功は、以上述べてきたような三重に組み立てられた「物語性」にあるといっていいただろう。

3 説明と物語

3.1 説明 vs. 解釈・理解

社会学や社会調査に関する最近のメタ理論的な議論では「物語 narrative, storytelling」と「説明 explanation」とが対比的に論じられることが多い。「説明」は実証主義的で自然科学に近い科学観と結びついた社会学的陳述の方法であり、それに対して「物語」は、解釈的で社会現象についての陳述の仕方として、よりふさわしい方法だと考えられている。この対比は、かつての「説明 vs. 解釈・理解」という対比とほとんど重なっている。後者の対比が論じられていた頃は、社会学の主たる課題は「行為」について説明したり理解することだと考えられていた。したがって「理解」とは、行為を行為者の主観的な意味世界に沿って解明していくことであった。また、それと対置

される「説明」とは、そうした行為者の主観的意味世界を無視した、それとは無関係な、観察者のいわば勝手な概念図式を用いた解明のことだと考えられていた。

このような対比の基礎にあるのは、「行為者の意味世界」か「観察者の意味世界」かの違いである。「説明」に対して「解釈」や「理解」を主張する人々は、観察者の用いる概念図式が行為者の意味世界をとらえる上で不適切だと考えたのである。（今でも、そう思っている人が非常に多いことは、現在出回っている質的調査のテキストを見れば分かる。）むしろ、「解釈」や「理解」といっても、どんな陳述も観察者である社会学者の言葉でなされるのだから、結局は観察者の意味世界に根ざさざるをえないことに変わりはない。したがって、本当の問題は単純に行為者の意味世界か観察者の意味世界かではなくて、観察者の意味世界は、行為者の意味世界をどのように位置づけたり取り込んだりすることが社会学の方法として適切なことか、ということではなければならないはずである。かつて A. シュッツが『社会的世界の意味構成』[Schutz, 1932=1982] でウェーバーの理解社会学を批判したのも、行為者の意味世界を探究する方法につきまとう諸問題にウェーバーが十分に気づいていないことにあった。

その後、社会学において行為論は下火になる。それに代わって、社会的世界そのものが人々の意味世界によって構築されているものだという社会構成主義ないし構築主義の見方が広まっていく。つまり、社会的世界そのものが意味的に構成されたものだという見方が普及していったのである。

「説明」対「物語」という対比は、これを背景にしている。ここでもやはり「説明」とは、対象である社会現象の意味的な構成を無視した観察者の勝手な了解図式によるものだとか概念化される傾向がある。実証的であったり科学的であったりすることは、対象世界にそなわっている意味的構成とは無関係な、観察者が独りよがりに作り上げていく知識を生産することになる、と考えられているのである。「物語」はそれと違って、社会現象の意味的構成をできる限り忠実に記述することをめざしている。意味的に構成されているということは、対象そのものが何らかの物語からなっているということだ。

それゆえ、社会学的陳述の方法として、「説明」よりも「物語」のほうが適切だと見なされる。これが、両者を対比する見方の基盤にある。

3.2 物語とは

このように「説明」と「物語」を対比させる考え方は、社会学においてこれまで「説明」とされてきたものが「物語」とは別ものだと見なしているが、実はこれは間違いだ。少なくとも、正確な理解のしかたではない。すでに見たように、デュルケムの『自殺論』はさまざまな物語にみちみちている。

「物語」のごく一般的な定義は、「時間に沿って生起していくさまざまな出来事（事象）が、意味的に関連あるような仕方では配置され陳述されることによって、ある世界を有意味で秩序あるものとして見せていくような語り」だと言えるだろう。小説、映画、演劇、そして歴史物語などが、こうした物語の典型である。「この小説は物語が破綻している」というような批評がなされることがあるが、それは、出来事のあいだの関連がうまく秩序づけられていないことを意味している。あるいは、かつて実存主義が盛んだった頃、不条理文学や不条理劇がもてはやされたことがあったが、これは、「世界に意味はない」（＝神はいない）というメッセージによって秩序づけられた物語であった。

「物語」の概念は、上の定式化から「時間性」の条件を取り去ってより広い意味でも成立するように思われる。小説とちがって論説文は、出来事を時間に沿って並べたものではないけれども、「起承転結」という形で物語性を持っていることが多い。むしろ、この場合でも、読むという作業は時間に沿って行われるので、時間性がまったく無縁だというわけではない。しかし、一つの絵、たとえばミケランジェロの「天地創造」にも物語を読み込むことが可能なことから分かるように、重要なのは時間的配列ではなくて、何らかの配列なのである。たとえば野家啓一は「理解不可能なものを受容可能なものへと転換する基盤である『人間の生活の中のある特定の主題への連関』を形作ることこそ『物語』のもつ根源的機能なのである」〔野家、2005：

316] としている。つまり、「物語」にとって、時間性は関連深いけれども、不可欠ではないのである。

このように考えると、何らかの形で秩序づけられた意味世界は物語の特性を持っているといえることができる。そうだとすれば、多くの科学的な研究論文が「説明」であると同時に「物語」でもあることになる。なぜなら、科学的な研究というものは、対象世界に潜んでいる秩序の構造を解明することをめざすものだからである。

ここで、これまでとくに解説もなしに用いてきた「意味世界」あるいは「意味」の概念について注釈を加えておいた方がいいだろう。それは、「意味」とは多様で主観的なものだということである。人びとはさまざまなものにさまざまな意味を見出すことができる。それが野家のいう「主題」に対応している。人生の意味とか歴史の意味のようなものだけが「意味」なのではない。「意味」とは基本的に関係的な概念であって、a という事項が、「A, B, C, ……」からなる秩序ある世界の中のたとえば A に関係づけられるとき、「a の意味は A だ」というような了解が生じる。単語の「意味」がそういうものである。秩序ある世界とは、基本的には観念によって構成された世界である。むろん、自然的世界の場合は、自然的事物がまずあって、それらの表象において秩序ある世界が構築される。われわれは自然的世界そのものに秩序があると考えているし、それは必ずしも間違いではないのだが、秩序が表現されるのはあくまで観念のレベルにおいてなのである。

したがって、自然科学の研究においても、しばしば「そういう意味だったんだ」という形で新しい知識がえられることがある。アルキメデスが風呂で比重の原理を発見して思わず「eureka」と叫んで裸のまま外に飛び出したという有名な逸話も、そのことを物語っている。

このようにして、「物語」が自然科学にも珍しくないことが分かる。実際、たとえば「進化論」や「ビッグバン仮説」のような時間性を持った理論はもとより、原子の周期律表や大陸移動説なども「物語」としての性質を十分に持っている。それらは、諸事物に首尾一貫した秩序を与える学説なのである。

3.3 科学的な説明における「物語」

そもそも「説明」とは、単純には、ある所与のデータや事実に関して、「なぜそのようなものとして存在しているか」という問いに答えることである。この答え方はさまざまでありうる。薄い説明もあれば分厚い説明もあるし、単純なものもあれば複雑なものもある。いずれにしても、基本的には、「説明」とは「問いに対して答えを明示的に提示する」ことである。問いと答えとのワンセットが「説明」を構成している。そして、説明が説明として受け入れられるためには、問いに対する答えが筋の通ったものだと思えなければならない。そこでは、「どういう答えが筋の通ったものであるか」についての、一定の共通理解が存在していることが前提となる。たとえば、 $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$ が $\frac{2}{5}$ ではなくて $\frac{5}{6}$ になることを説明して納得してもらうためには、分数や足し算についての基本的な知識が共有されていなければならない。このように、「説明」とは、ある最低限の共通理解を前提にした上で、問いに対して答えを提示することだ、ということができる。

科学的理論も、しばしば物語の性質を持っている。したがって、科学的説明と物語とが必ず対立すると考えるのは正しくない。ただし、われわれが何に意味を見出すかが客観的には決まっていないように、何に物語を見出すかも基本的には決まっていない。それは、一つの小説がある人は面白いと思いき、他の人は面白くないと思うのと似ている。物語であるかないかは、秩序ある意味世界を浮かび上がらせるような形で諸要素が配置され関連づけられているかどうかによるのであり、その際、どういうものが秩序ある意味世界でありうるかは、基本的には主観的なものなのである。

こうしてみると、科学的説明が単なる「説明」であって「物語」ではないと主張する人々は、端的に、「その説明は、自分たちにとって十分に有意味な説明にはなっていない」という異議を申し立てているだけだということになる。秩序ある意味世界を自分たちの主観の中に浮かび上がらせてくれないもの、それが「物語」ではなくて単なる「説明」なのである。いわば、「理屈としては筋が通っているが、どこかしら完全には納得できないもの」である。

研究の中には、これとは逆に、「理屈としては筋が通ってはいないが、あるいは必ずしも十分に筋が通っているとはいえないが、意外に説得性のある話」というものもある。それは、展開されている話が読者にとって秩序ある意味世界を浮かび上がらせるのに成功しているのだが、その成功が必ずしも「科学的説明として筋が通っていること」には依存しておらず、せいぜい「筋が通っているように見えること」を援用しているような場合である。ここで「科学的説明として筋が通っているかどうか」ということについても、異論の余地がありうるかもしれない。たとえばかつて、マルクス経済学と新古典派的な経済学とのあいだには、どちらが「科学的か」をめぐる対立が長らく存在してきた。それは、説明が成立するための最低限の共同主観性さえもが確立されていないような場合である（本当のところは、この対立の基盤にあったのは、それぞれの「科学的説明」を成り立たせる条件として、ミニマムな「説明」を超えた「物語」が入れ込まれていたというのが真相であるが）。しかし、多くの場合、研究者というものは「どういう説明が妥当な説明か」についてある程度の共通理解をもっているものである。たとえば、マルクス経済学と他の経済学とのあいだでも、国民経済の諸指標や市場の需給関係についての基本的な説明図式については、大きな共通理解が成立していた。

「科学的説明として筋が通っていること」に依存しないでも、読者にとって「秩序ある意味世界を浮かび上がらせる」ことができるとすれば、そこにはやはり「物語」が成立していることになる。いうまでもなく、普通の小説や映画がもともとそういうものだ。あることが「物語」であるためには、とくに「科学的説明として筋が通っていること」は必要ない。

ここで、あるひとかたまりの陳述の体系を「説話」と呼ぶことにしよう。任意の説話は、「説明」であったり「物語」であったり、あるいはどちらでもなかったりする。したがってわれわれは、説話について基本的に図1の3つのカテゴリーを設定することができる。このうち、「説明にはなっていない物語」は「フィクション」とよんでいいだろう。

言うまでもないことだが、「科学的説明として筋が通っている」というこ

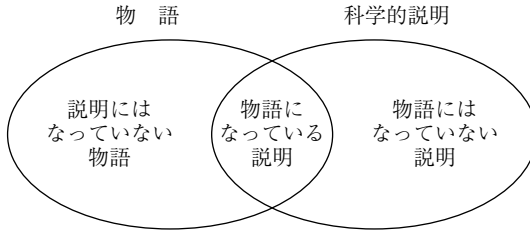


図1 物語と説明

とは、「科学的説明として正しい」ということと同じではない。むろんわれわれは「正しい説明」をめざすのだけれども、何が正しい説明であるかは、われわれは究極的には知りえない。われわれが実際に判断できるのは、「科学的説明として筋が通っている」かどうかということであり、それは、その時点でのある人の知識の全体に照らして判断しうることである。その際われわれは、あるミニマムな「共同主観性」に訴えかけている。言いかえれば「説明」とは、「筋が通っている」という点において共同性を獲得しうるような知識を作り上げる営みだといえるだろう。

4 社会学における「説明」と「物語」

4.1 物語性の理由

ここでもう一度、社会学における「説明」と「物語」との対立に戻ってみよう。「物語」を重視する議論には、次の3タイプがあるといえるだろう。

- (1) 社会学的研究というものは、本来的に「物語」でしかありえず、それはかつて「科学的説明」だと見なされてきたものもそうなのだ、という「本来的物語性」説。
- (2) 社会学では、科学的説明というものはもともと不可能なので、結局、物語であるしかない、という「消極的物語性」説。
- (3) 社会学では、科学的説明というものは不適切ないし不十分な陳述の方法であって、物語こそが社会学のあるべき陳述の方法である、という「規範的物語性」説。

これらのあいだには、いくつか重要な違いがある。たとえば、規範的物語性説は、量的調査と対立させて質的調査を主張する人々によく見られるが、社会学的説話は量的調査がそうであるように物語でないことも可能だと考えている。しかし、消極的物語性説は、そうは考えない。あるいは、社会学のメタ方法論的な議論の中には、量的調査研究といえども結局のところは「物語」なのだという本来の物語性説を唱えるものが少なくない。

しかし、こうした違いにもかかわらず、これらはいずれも、社会学においては「科学的説明」が不可能であるか不適切だと判断している点において、共通している。私には、この判断は次の点で決定的に間違っていると思われる。なぜなら、「科学的説明」というものを放棄するということは、共同のものであるような正しい知識を確立しようとする志向を放棄するということだからである。ここで詳細に論じる余裕はないが、「科学」という営みは結局のところ、「道理的に共有化しうる知識を作り上げていこう」とする共同作業である。どのようなやり方やどのような内容のものが「道理的」であるかについては異論がありうるし、実際にあったし、しばしば誤った理解も存在してきたが、「道理的な共同知識」を形成していこうという一点においては動じない。

ただし「物語」を主張する議論の中にも、「物語という方法こそが道理的な共同知識を獲得するための最も有効な方法である」と考えているものがある。確かに、「物語」は共同知識とそれを媒介にした共同性を確立する上で、きわめて有効なものである。そのことは、「国民の物語」や「革命の物語」を考えてみればすぐ分かる。しかし、ここには「知識の正しさ」という観念が曖昧になっているか、もしくは欠如している。「知識の正しさ」という価値を設定するかどうか、設定するとすればそれをどのように概念化し、そのためにいかなる指針や手続きを定めるか、というような点についての問題意識が欠けているのである。

もっとも、物語を主張する議論にも、いくつかの首肯しうる論点がある。

(a) 社会学の科学的な探求を旨とする場合においても、探求成果を提示する際、単なる説明に止まることなく物語性を持たせた方が望ましいということ

とについては、何ら異存はない。物語と説明とは対立するものではなく両立させるものであり、説明をミニマム要件としながら物語性を付加していくのはいいことだ。

(b) これまでの社会学において、「科学的説明」だと見なされてきたものが、しばしば実際には説明としては筋が通っていないくて、物語でしかなかったということは、否定できない。コントやスパンサーの進化論やマルクス主義がそういうものであったことはよく知られているし、パーソンズ理論やフーコーの権力論などにもそういう側面がある。しかし、ある時点で「それなりに筋の通った説明」を与えていると見なされた理論が、後になって「実は筋が通っていないかった」と分かることは、知識の歴史一般においてあまねく存在していることであり、なにも社会学に固有の現象ではない。

(c) これらとは別に、社会学の物語性を支持するより強力な論点がある。それは、社会的世界そのものが一種の物語だと考えることができる、ということである。たしかに、すでに見たように社会的世界は基本的に、意味的に構成されたものであり、多くの側面において複雑に重層化されたさまざまな「物語」からなっている。(ただし、すべてが物語でおおわれているわけではない。)[「国民の物語」や「革命の物語」や「神の物語」がそうであり、ミクロなレベルでも「家の物語」や「会社の物語」などがある。個人や集団がいろいろな「物語」を生きているのは確かだろう。

最後の点を考慮に入れると、社会学研究における「物語」に二つの異なるものがあることに注意しなければならないだろう。それは、(1) 対象世界が自らについて作り出している「物語」と、(2) 社会学の研究者が自らの陳述において作り出す「物語」とである。この対比は、一次理論／二次理論、あるいは emic/etic などの対比と重なっている。

二次理論としての社会学研究は、対象世界の「物語」を解読することをめざすこともあるしそうでないこともある。なぜなら、対象世界が常に自らの「物語」をもっているとは限らないからだ。しかしそれと同時に、対象世界の現象を説明する際、それまで気づかれていなかった対象世界の「物語」を発見して、それを用いて説明するということも、しばしばありうることであ

る。「階級の物語」〔盛山，1999〕は、そのようにして発見されたものだ。

4.2 第一次の解釈としての統計指標

すでに述べたように、量的な社会調査におけるデータは、「法則」の発見などからはほど遠く、容易には「理解可能」なものではない。データを分析するとは、当初は理解可能ではないように見えるものの中から理解可能なものを見つけだすこと、あるいは、それまでは知られていなかった新しい理解の仕方を見つけだすことである。

社会学的量的データは多くの場合、まず「調査票」の形で現れる。調査票に書き込まれたデータのの一つ一つは局所的に理解可能だ。「現在、何歳ですか」という問いに「49」歳と記入してあれば、ああこの対象者は49歳なんだとよく分かる。しかし、こうした局所的な理解可能性があるからといって、ただちに収集されたデータの全体が理解可能になるものではない。

量的データを全体として理解可能なものにするために、われわれはふつう調査票上の書き込みを、数値からなるデータ・ファイルに転換する。このファイルは、テキスト・ファイルの場合でも、0～9の数字と空欄とが一見まったくランダムに並んでいるだけの記号列にすぎない。そのままではそこから何らかの意味あるものを読み取ることは、まず不可能だ。

統計ソフトを使ってこの記号列を処理すると、一定の「理解可能」な出力が現れてくる。単純集計やクロス表などがそうだ。統計ソフトは、暗号を解読するエニグマのような役割を果たす。一見ランダムに並んでいるにすぎない記号列から、統計的に意味のある「数値」を産出してくれるのである。たとえば、ある「変数」の値ごとのケース数やその比率、平均、分散などである。

こうした統計指標は、それなりの意味を持っている。統計的な分布のしかたを知ることは、われわれの知的関心に答えるものである。しかしここで次の点に注意しなければならない。それは、こうした統計指標は「普遍的に適用可能」なものだということである。つまり、どんな統計的データに対しても（むろん変数が量的なものかカテゴリカルなものかによって多少の違いは

あるが)適用することができて、具体的な数値が算出できるという性質がある。したがって、統計指標とは、物差しや体重計のような「共通の測定装置」であり、それによって測定される「共通の尺度」なのである。

統計ソフトを利用することによってわれわれが手に入れる諸統計指標の値は、データを普遍的に適用しうる尺度で測定した結果の数値である。平均や分散の値は、個人々々の身長や体重の値のように、共通の尺度で測られたそれぞれのデータの特徴を表している。共通の尺度にしたがって現象を測定した結果の数値は、「共通の尺度」に基づいているという理由によって、われわれにとって意味のある数値になっている。しかも、それを異なるデータや異なる変数のあいだで比較すれば、私の一年前の体重と現在の体重との違いを知ることがそうであるように、より大きな知的関心に答えることになる。歴年ごとに自殺を算出したひとかたまりの数値は、このような意味において、それだけでわれわれに有意義なものとして現れている。それは、「秩序あるもの」としてわれわれに現れているということである。

通常、計量分析の第一歩は、こうした統計指標を算出することである。やや先に進むと、単一の変数についてだけでなく、2個以上の変数を組み合わせて統計指標を求めることになる。自殺率を歴年別、地域別、性別などで計算するのがそうだ。デュルケムは行っていないが、量的あるいは質的な種々の相関係数(あるいは関連度指標)を求めることもできる。

統計指標は、量的データを「秩序あるもの」としてみるための、普遍的に適用できる観測装置である。もともと、そういうものとして開発されてきたのが、今日広く使われている種々の統計指標なのだ。(誰も使わないような統計指標も無数に考えることができる。それらが使われないのは、われわれの知的関心にとって有意義なものを見せてくれないからだ。)

一般に、データ(あるいはテキスト)に秩序を与えること、より正確に言えば、「秩序あるものとしてみること」あるいは「秩序を見出すこと」は「解釈」と呼ばれる。「意味を見出す」といってもよいが、「意味」とは何らかの秩序構造と相即的なものだ。量的データから統計指標を計算するという作業は、「第一次の解釈」と呼ぶことができるだろう。それは、それまでは

ランダムな記号列のようにしか見えなかったものに、基礎的な秩序を与えるのである（なお、ついでに言うておけば、聞き取り調査や観察記録などそれ自体文書化されている質的なデータは、すでに「第一次の解釈」は完了しているというてよい。それらはすでに何らかの形で秩序づけられているのである。読んで理解できるということは、ある解釈可能な形で提示されているということだ）。

デュルケム『自殺論』第5章における計14個の図表は、それ自体として自殺に関わるこうした第一次の解釈を表示している。その背景に、各国のさまざまな政府機関のデータ収集と計算、あるいは甥のマルセル・モースの地道で膨大な再集計作業があっただろうことは想像に難くないが、そうした作業の成果として、第一次解釈としての図表が算出されているのである。

4.3 量的調査における「物語」の重要性

ところで、「解釈」という言葉は量的な調査研究において、ふつうこれとは異なる意味で用いられている。それはたとえば、性別と個人収入のクロス表を出力して、男性のほうが女性よりも収入が高い方に分布する傾向がはっきりと見出されたとき、その結果から「男女の収入格差は大きい」と判断するようなことをさしている。この意味での「解釈」とは、出力された統計指標を「対象世界の構造的特性を記述する言葉」で表現しなおす作業だといってよい。この段階においてわれわれは、統計指標という普遍的な言語から、対象世界を記述するための固有の言語系に移行することになる。これを「第二次の解釈」と呼ぶことができる。

調査法の多くのテキストで、「仮説構成」や「データによる仮説の検証」と呼ばれている作業が関わっているのは、基本的にこのレベルの「第二次の解釈」である。「仮説検証」とは、たとえば「男性の個人収入の方が女性のそれよりも高い傾向がある」というような「仮説」を立て、それをデータでチェックすることである。この意味での「仮説」は、対象世界の構造的特性についてのものであり、データがその仮説と適合しているかどうかをチェックすることは、データの第二次の解釈を行っていることになるのである。

今の例から分かるように、こうした第二次の解釈、あるいはいわゆる「仮説検証」なるものは、しばしば、どうでもいいつまらないものだ。それは、どんなに高度な多変量解析を駆使していてもそうだ。何がつまらなくて、何が興味深いものであるかは、かなり主観的なものだが、一般的には次のように言える。すなわち、(1) われわれは基本的に対象世界について新しく何かを知ることに関心を持っているのであって、すでに知っていることを確認するだけのことはつまらない。(2) 対象世界の構造的特性の一つ一つをバラバラに知ることよりも、多くの特性を齊合的に理解しうるようなより基本的な、あるいはより包括的な特性について知ることの方が興味深い。(3) したがって、われわれにとってより興味深いデータ分析とは、一次的解釈によってえられたさまざまな統計指標について、それらを総合的に理解するような説明図式を提示するものであり、それは「物語」と呼ぶにふさわしいものになる。

このようなレベルの分析、すなわち、データを物語によって説明するような分析を「第三次の解釈」と呼ぶことにしよう。いうまでもなく、デュルケムの『自殺論』は、そうした第三次の解釈としての量的データ分析として代表的なものである。

5 物語でもある説明を

すでに述べたように、量的データと違って、質的データはそれ自体として読んで理解できるという自己解釈提示性を備えている。そこには、しばしば対象世界の自己物語が提示されている。これは、質的データの、量的データよりもはるかに有利な特性であり、この点こそが、今日、若い研究者のあいだで質的調査への関心が相対的に高まっている最大の理由だろう。これは、デュルケムの時代とは違って、現代では、量的データ分析から「物語」を作り出すことがきわめて難しくなっている、ということの裏面である。

これはまた、巨大理論の失墜とも関連している。われわれは、かつてのように、マルクス主義に則って実証データを「解釈」したり、近代化論に沿っ

て計量分析を行ったりしても、ほとんど意味のない時代にいるのである。他の中小の理論も、あまり役に立たない。このような状況では、量的データから「物語」を構成することは、困難である。そのため、比較的安易に「物語」が手に入る（と思われる）質的データに飛びつくのだ。

むろん、安易に手に入る「物語」が、われわれにとって知る意義のあるものだとは限らない。「物語」でありさえすれば何でもいいというわけではないのである。

実証的研究というものは、観測された諸事実について説明することがミニマムな目標である。研究者による独自の説明こそが、研究を研究たらしめる。その上で、さらにその説明を物語的に構成することができれば、それは多くの人々にとって興味深い知識となるだろう。このことは、質的調査と量的調査の違いを超えて、共通にあてはまることである。

文献

Durkheim, Émile, 1897, *Le suicide : étude de sociologie* / par Émile Durkheim., Paris :

Félix Alcan, Éditeur. (=1985, 宮島喬訳『自殺論』東京：中央公論社.)

野家啓一, 2005, 『物語の哲学』東京：岩波書店.

Schutz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt : eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wien : Springer-Verlag. (=1982, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成——ヴェーバー社会学の現象学的分析』東京：木鐸社.)

盛山和夫, 1999, 「近代の階層システムとその変容」『社会学評論』50(2)：3–23.

———, 2004, 『社会調査法入門』東京：有斐閣.

Weber, Max, 1919, *Politik als Beruf*, München : Duncker & Humblot. (=1980, 脇圭平訳『職業としての政治』東京：岩波文庫.)

———, 1919, *Wissenschaft als Beruf*, München : Duncker & Humblot. (=1980, 尾高邦雄訳『職業としての学問』東京：岩波文庫.)

———, 1920, “Die protestantische Ethik und der ‘Geist’ des Kapitalismus,” *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Tübingen : J.C.B. Mohr. (=1989, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』東京：岩波文庫.)

Explanation and Narrative : What Should Social Research Aim for?

Kazuo Seiyama*

■Abstract

There are everlasting arguments that emphasize the opposition of the dichotomy between quantitative research and qualitative research concerning methods of social research. Recently, there has been particularly expanded a view of sociology that considers itself as a “narrative,” rather than an empirical science that strives for objective “explanations” as considered until now. From this viewpoint, there are not a few tendencies to think that qualitative research is the appropriate method of research in narrative-oriented sociology. This paper clarifies that such dichotomic view is fundamentally mistaken.

The biggest cause for this dichotomic view is the natural science model which is premised on extreme experimentalism for sociological methodology. Both of the camps that are in opposition, namely the researchers that aspire to the natural science model, and those that reject it, have major misunderstandings that they commonly take for granted. Actually, as conspicuous in Durkheim’s “On Suicide” which is, in one aspect, really positivistic, the success of important sociological researches that have contributed to the development of sociology has been in their “narrativeness”, rather than in following the natural science model.

Precisely, considering explanation and narrative to be in opposition is a mistake. The scientific explanations of the natural sciences themselves are often narrative. Indeed, in the search for the social world as a world of meaning we sociologists are only able to construct from the viewpoint as researchers, a new configuration of narratives that are embedded in society and social phenomena. Therefore, we must strive for explanations and narrative at the same time for not only qualitative research, but also for statistical and quantitative research.

*The University of Tokyo

Key words : narrative, explanation, social research, qualitative research, quantitative research